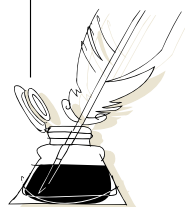


人生讃歌

檜山博

働くということ



二十代の初めのおカネがなくて閉口していたころ、おカネをつくるには質屋へ行くか勤め先の経理から前借りするしかなかった。質屋へ入れた腕時計や万年筆を受け出すのも前借りも、次の給料から払った。ぼくは田舎者で気が小さいうえ、私産も才智もないから、おカネを得るのは自分で働くしかないと思ひ込んでいたのである。

★

以前ある新聞に「働かないで年収五六〇万円を稼ぐ方法」という本の広告が出ていたことがある。それが売れに売れて十二万部を超えたと書いてあって驚いた。かりにその本が二冊千円したとして、十二万人が一億二千万円のおカネを払って買って読んだことになる。これは面白い。ぼくは貧しい農家に生まれて父母や家族が炭焼きや農作業で一日十五時間の重労働をするのを見てきたから、自分の体を使って働くのが当然と思っていた。それが働かないでおカネが手に入るといのである。見過ごしにできる話ではない。

とはいえ、働かないでという言葉になんとなく後ろめたさをおぼえる。たとえ先祖から受け継いだ財で生活したり、一人つきりで機械を使って投資で稼いだりする人も、やはり頭脳

や神経を使っているわけだから、生きるためには人は何らかのかたちで働いているということになるはずだと思うのだ。だから働かないと表現される状態がどういことなのか、ぼくには想像できないのである。

★

ちなみに「働かないで年収五六〇万円を稼ぐ方法」の著者は、インターネットの超専門家だという。インターネットも携帯電話も持っていないぼくには、それがどういう仕掛けの機械なのかまったくわからないが、精通している人が書いたものだからしつかりした著書なのだろう、と思うしかない。だったら素人のぼくは「そういうものか」と思っていればいいわけだが、しかし本当に働かないで大金が手に入るなら聞くだけ聞いてみたいのである。ぼくはいったって俗っぽいのである。

★

それで妙なことを思い出した。ぼくが小学五年のとき校長先生が「働くとは人が重い力を出す」と書いて「はたをらくにすること」である。みんなも家の仕事を手伝うように」と言った言葉である。そのときぼくら山猿じみた子供はみんな、校長先生の言うことの意味などわからず笑っているだけだった。面白い語呂合わせみたいだと思った程度で、すぐ忘れてしまった。

★

ぼくは十九歳から会社に勤め給料をもらっていたが、下宿代と昼飯代がやとで同人誌の発行代や大学の通信教育の授業料も払えず、下着も靴下も買えないほど貧乏だった。働くのは自分の生活のためと思うのはもちろん、傍を楽にするなど考えたこともなかった。そんなある日、古本屋で買った本の中に、人が働くのはおカネを稼ぐためではないと書かれてい

て、びつくりした。なんだなんだ、と読み返した。まず人は生まれてから二十二歳ころまで育つのに三千万円近くかかると書いてある。赤ん坊のときのミルク代、襁褓^{おしめ}、玩具、衣服、食費、幼稚園代とこまかい。小学校から大学まで出たとして、十六年間の学費と下宿代、生活費は普通、親が出す。

二十三歳から社会で働く子供が、親が使ってくれたおカネを親が生きている間に返すのはほとんど無理である。だがもらいっぱなしでいいはずがない、という。親が勝手に生んだのだから育ててもらったおカネを子供が考えなくていい、という問題ではない、と書かれている。そこで親に返せないから社会に返



挿絵/中江潤一

すことになる。その方法が働くことだというのである。要するにおカネをもらうために働くのではなく、親からの借りを返すために働き、その礼として社会から給料をもらうというのである。そう書いてあったのだ。驚いた。そう言われればたしかにそのとおりだという気はした。しかし何が何だかわからないが、こじつけみたいな考え方の気もするのだった。それで手元にあるいろいろな辞典で「働く」を引いてみる。

思ったとおり「体を動かす、努力する、精神が活動する、役に立つような用をする、肉体、知能などを使って仕事をする」と書かれているなかに「他人のために努力したり奔走^{ほんそう}すること」(日本国語大辞典)というのがあったのだ。「傍を楽にすること」が、ちゃんと辞典に出ていたのである。辞典は引いてみるものである。納得である。たしかに商店の人、医師、タクシーなどの運転者、教師、農業者、漁師はじめ、働く人はみな人のために働いているわけである。

★

ともあれよくも、小学生のころ親に言われ、いやいやながらも雑巾^{ぞうえん}がけや家畜の世話、農作業を手伝ったら家族が喜んでくれたので嬉^{うれ}しかったことはある。その後、会社に四十九年間勤めたのは自分と家族が生活するおカネを得るのが主目的ではあったが、もちろん給料をくださる会社のためという認識はあった。しかしそれ以外に役に立っているかもしれないなどまでは、あまり考えなかった。ぼくはだいたいその程度の人間である。だが、ぼくが自分と会社のためと思って働いてきたのが、それ以外の誰かを楽にしていたとか親への返済だったとか言われると、何だかわからないが、ちょっと愉快な気分になることはたしかである。